

A beginner's guide to the Baroque Natural Trumpet

初心者のためのナチュラルトランペット案内

これからナチュラルトランペットを始めようと思っている人たちへ、どうやって始めたら良いのかガイドをする目的でこの記事を書きました。また併せて知っておくべき基本的な情報も提供したいと思います。

【ナチュラルトランペットを勉強することによるメリット】

バルブのついていないバロック期のトランペットの演奏を学ぶことには様々な利点があります。それは、輝かしい過去のトランペットの遺産に触れられるということに留まらず、モダントランペットを演奏する場合においても音楽性や技術を磨くのに役立ちます。ナチュラルトランペットを演奏してみると、どうしても基本的な問題に向き合わざるをえなくなります。それは、音の出し方や柔軟性、音域の幅、音を正確に捉えること、アーティキュレーション、アンブシュア、息のコントロールなどの問題です。おそらく一番のメリットは、オーラルな技術が向上することでしょう。また、ナチュラルトランペットは高次倍音での正確性が要求されますので、倍音の違いを聴き分けたりする能力が必須です。フレットのない弦楽器や歌のように耳を訓練することが良い演奏へとつながるのです。

バロック音楽をピッコロトランペットで演奏する人にとっては、ナチュラルを練習することで多くのことを得られるでしょう。正しいバロック演奏のフレージングやアーティキュレーションのみならず、ナチュラルトランペットの音域毎のパート（プリンシパル、中音域、クラリーノ）の持つキャラクターについても理解が深まります。ピッコロトランペットでナチュラルトランペットの音を真似ることはできませんが、本来の音を知っておくことはその音楽家の演奏を豊かにすることは間違いありません。

【オーセンティック（正統的）ということについて】

バロックトランペットを演奏するための第一歩は、まず適切な楽器を手に入れることです。

しかし、どれが適切な楽器なのかという点については、これという正解がないので、いろんなことについて検討が必要になります。例えば、現代のメーカーはたいていエーエやハース、ブルなどの歴史的な楽器をモデルにした復元楽器を製作して

いますので、どう違うのか知っていた方がいいでしょう。タール教授の Art of Baroque Trumpet Playing (Schott & Co. 2000) の1巻と2巻に歴史的オリジナルの楽器と現代のコピー楽器の写真が載っているので大変参考になります。またバークレイの Art of the Trumpet-Maker (Oxford University Press 1996) も17、18世紀のニュルンベルクの楽器がどのように作られたか仔細に説明してありますので、理解を深めるには最適の書です。どのように作られているのかという過程も含めて、事前にいろいろ情報を得ておいた方が良い買い物ができるでしょう。

楽器購入の前にオーセンシティ（正統性）の問題について触れておきましょう。ナチュラルトランペットは自然倍音しか出すことができない楽器なので、いくつかの音の音程は平均律からかなり乖離しています。一番問題になるのは11倍音(F)と13倍音(A)です。11倍音はファにしては高すぎるしファ#としては低すぎます。また、13倍音のラもかなり音程が低くなります。17、18世紀の奏者はこれらを唇で調整（ベンディング）していました。また、この二つの倍音ばかりではなく、第8倍音を下げたシの音を出したり第9倍音を下げたド#を出したりしていました。現代になってから、1960年頃にオットー・シュタインコップがドイツのメーカー、フィンケの製作した楽器に穴(vent hole)を開けて、不安定な11,13倍音の調子を補正するシステムを開発しました。シュタインコップ自身はルネサンスコルネットの復元・製作を手がけていましたから、そこからヒントを得たのかもしれませんが。それとは別に、イギリスの奏者マイケル・レアードはさらに開発を進めて、より音程を安定させる4つ穴のシステムを考案しました。

こうした補正孔のおかげでナチュラルトランペットは演奏しやすくなったのですが、音質は本来のものから若干変わってしまいました。この妥協策の楽器は300年前に使われていたものとは違って、もはや「ナチュラルトランペット」とは言いがたいものがあります。従ってここでははっきり区分するために、穴のない楽器を「ナチュラルトランペット」、ベントホールをつけた楽器を「バロックトランペット」と呼ぶことにします。

以上のように補正孔は現代に生み出された妥協案ではありますが、必要だと感じているプロ奏者は多いようです。無孔の楽器はその正統性と音質の面で得難いものがあるのですが、現代の聴衆は、平均律に慣れていて、音程の正確なことにこだわる傾向があるので、ナチュラルトランペットでそれに応えるにはかなりの危険を冒すことになります。バロックトランペット専門の奏者の数はこの数年でかなり増加

しましたが、モダン楽器も併用している奏者にはその安全性という点で孔のついた楽器が選好されているようです。

それ以外にもどんなマウスピースを使うかという問題があります。ナチュラルトランペットを始めるプレイヤーの多くは、モダンのマウスピースを使ってシャンクのズレはアダプターで調整しているようです。正統的なバロックのマウスピースの特徴は、広いカップと大きくてフラットなリム、急角度なエッジ、長めのシャンクなどです。長めのシャンクはリードパイプにテーパーがないことを補完する役割を果たしていますし、またカップの大きさや形状などは音質や唇での調節を容易にすることに関係しています。ナチュラルの場合は高次倍音を使いますが、必ずしも浅くて小さいカップが高音域を出しやすくするための助けとはならないのです。

マウスピースの選択は極めて個人的な好みの問題ではありますが、奏者はこうした正統性と吹きやすさのバランスをとる必要があります。初めは慣れたモダンのマウスピースを使い、徐々に楽器に慣れて来たらより正統的なマウスピースにスイッチしていくのがいいでしょう。プロの奏者がモダンのマウスピースを使うのであれば、それは歴史的様式感をふまえた演奏をより確実にするための妥協策だということ認識しておくべきでしょう。

補正孔やテーパーのついたリードパイプ、モダンのマウスピースなどを使うのは邪道だという意見もありますが、専門的な細かいことは初心者にとってはどうでもいい問題なので、とりあえず慣れたマウスピースで孔なしのナチュラルトランペットを吹いてみるべきでしょう。理論と実践の軋轢は他のジャンルと同じようにバロックトランペットの世界にもありますが、それはちゃんとした楽器を買って人前で演奏するようになってから考えればいいと思います。ただナチュラルトランペットを学ぼうという人は歴史的な演奏法というものがどんなであったかを尊重する必要があります。孔付きの楽器は正確さや安全性を高めますが、その一方で特に初期の段階ではそれがオーバーブロー気味になったりアーティキュレーションが鋭くなりすぎたりという悪い癖がつきがちですので注意が必要です。

【楽器の入手法】

楽器メーカーやマウスピースについてはヒストリック・ブラス・ソサイエティが一番良い情報源です。2001年のニュースレターに最新の調査が載っています。

この稿の目的は特定のメーカーを推薦することにあるわけではありませんが、そのリストのなかからいくつかピックアップすると、バークレイ（カナダ）、エッガー（スイス）、キーヴィ（イギリス）、マイル（ドイツ）、ナウマン（アメリカ）、トムス（イギリス）、ハイデ（オランダ）などが挙げられます。David Baum の [Natural Trumpet Resource Web Site](#) も参考になります。

時折中古のナチュラルトランペットがプロショップやイーベイなどのインターネットオークションで出回ることがあります。モダンのB管トランペットを解体してナチュラルに組み立てなおすという手もありますが、せっかく学ぶのであればきちんとした楽器を手に入れた方がいいでしょう。

たいていのナチュラルトランペットは次のようないくつかの部品によって構成されていて、パーツを替えることによりいくつかの違う調を演奏できるようになっています。メインの部分はコーパス(Copula)、調整変換用の丸い部分がクルーク(Crook)、コーパスとクルークをつなぐまっすぐな管(孔つきと孔なしがあります)をヤード(Yard)と呼びます。これらのパーツはハンダ付けされていませんが、固定されていないことこそが音程調整などで柔軟性をもたらす元となっているのです。またリードパイプの延長管やチューニング用の小さい部品であるビット(Bits)もあります。メーカーによってはリードパイプの部分にネジがついていてチューニング調整できるようになっているタイプもあります。

メーカーによって違いはありますが、通常はD（モダンピッチ、A=440Hz）、D♭（バロックピッチ、A=415Hz）、C（モダンピッチ）そしてC♭（バロックピッチのC）が使えるようになっています。

楽器を買う際にはいろんな要素を考慮する必要がありますが、検討項目をチェックリストとして作成してみました。

- ・モデルタイプ

- どの歴史的モデルの楽器にするか（エーエ、ハース、ブルなど）

- ・マウスピース

- そのメーカーはマウスピースの選択の余地があるか。モダンのマウスピースは装着可能か

- ・キーとピッチ

- どのピッチの楽器にするか

- ・孔つきにするかどうか

補正孔付きの楽器かどうか。孔なしのヤードも手にいれられるか

・チューニング方法

チューニングビッツを使うのか、リードパイプで調整可能か

・ケース

ケースはついているか、別途買わなければいけないのか

【教材について】

つい最近までナチュラルトランペットを勉強するためのいい教材はありませんでした。バロックの作品が不足していたというわけではありません。バッハやヘンデルの偉大な作品はたくさんあるのですが、それらが楽器の演奏を勉強するのに適切な教材というわけではないからです。しかし、エドワード・タールの新しい教本 Art of Baroque Trumpet Playing 全3巻 (Schott & Co. 2000) が出版されたおかげで、ナチュラルトランペットを学ぼうという奏者にとってその問題が解決されることとなりました。タールの教本の出版以前には、歴史的な教材、ファンティーニ (1638) やアルテンブルグ (1795)、デュベルネ (1857) などのエチュードを使って勉強するか、あるいはフリーデマン・インマーやマイケル・レアード、エドワード・タールなどのところに行行って直接教をを請うしか方法がなかったのです。

本で学ぶよりも優れた教師につくほうが良いに越したことはありませんが、タールの教本は歴史的奏法の大事な点を全て網羅してありますし、彼の豊富な指導経験による実践的な練習法が記されています。練習に有効なヒント、アンサンブルでの音程のとり方、適切なトリルのかけ方などにも言及してあります。タールの教本は補正孔については触れていませんが、その他のナチュラルトランペットの勉強に関することは全てこの3巻に網羅されています。補正孔についてはマイケル・レアードの Brass WorkBook for Natural Trumpet (BrassWorks 1999) を参考にするといいでしょう。ただし、もちろんこうした優れた教本で演奏法を学ぶことは可能ですが、きちんとプロフェッショナルなナチュラルトランペット奏者に教えてもらうことが、特に初期の段階では重要だと思えます。

演奏に必要な技術的基礎が得られたらば、ナチュラルトランペットで演奏出来るレパートリーの宝の山が待っています。タールやギュットラーの貢献により、きちんと校正されたバロックトランペットの楽譜が出版されているのでそれらを利用することができます。オーケストラやアンサンブルでのレパートリーとしては、ヘンデルやバッハよりもまずヘンリー・パーセルの曲に取り組むことをお奨めします。

パーセルの曲は通常2本のトランペットによるデュエットになっていて、スタミナや音域という点からもそれほど困難ではありません。聖セシリアの日のオードや妖精の女王などは2人で練習するのに効果的な教材ですし、また演奏自体も楽しいものです。パーセルの全作品はバッハやヘンデルの全作品集などと共にムジカ・ララから出版されています。誰しも持つべきオーケストラスタディでしょう。

アンサンブル演奏で問題となりがちなのは音程です。これはナチュラルトランペットの音程が自然倍音から成り立っているためです。従って練習室にこもって一人でさらうよりも、外へでて仲間を募ってアンサンブル練習をする方がいいでしょう。バッハやヘンデルの曲では、まずクラリーノ（1番）パートにトライする前にプリンシパルパートから始めた方がいいでしょう。ソロの曲を練習したいのであれば、パーセルの曲を始めとして、ファンティーニやヴィヴィアーニのソナタ、ヘンデルの組曲、ジェレミア・クラークの組曲などが初心者には適しています。

【まずは吹いてみよう】

初めての人は楽器の持ち方にとまどうかもしれません。メーカーや楽器のタイプによって違いますが、通常はモダン楽器と同じく左手で楽器を持ちます。装飾用のボールのところか、ひもでおおわれた木のブロックのところがちょうど良いグリップになるはずですが、右手は反対側のヤードを持つかあるいは楽器にさわらずただ奏者の脇に添えます。補正孔のついた楽器であれば右手はその穴を操作するのに使います。ロングタイプのトランペットの場合は楽器を持つポジションに慣れるのに少し時間がかかるかもしれません。モダンの楽器に比べると楽器自体は軽いのですが、腕を伸ばす姿勢に慣れる必要があるからです。繰り返し少しずつ練習するのが良いと思います。

楽器を持つポジションが決まったら次は音楽を創ることに専念します。しかし最初は往々にして思うようにいかないこともあるでしょう。それは倍音列が高いことと音律が違うこと、管の長さがモダン楽器の倍近く長いのでレスポンスが違うこと、テーパのないリードパイプなどがその要因です。ピッチを確かめるにはチューナーを慎重に使い、やがて時間が経つうちに耳と呼吸、そしてアンブシュアが楽器の特性に慣れてくるはずですが、モダン楽器の経験の長い人でさえナチュラルトランペットの感覚を掴むにはしばらくかかると思います。

最初のうちは補正孔を使わないことをお奨めします。基礎練習に当たるプリンシパルの音域では穴を必要としませんし、まずはナチュラルトランペット独特の感覚に慣れることが重要だからです。それから調子はずれの音を無理矢理平均律に合わせようとしないうほうがいいでしょう。力を抜いて自然に吹くことを体感できたらやがてナチュラルトランペットの持つ柔軟性が見えてきますし、いわば「自然にあらがって吹かない」ことによって豊かな響きが得られることがわかってくると思います。

ナチュラルトランペットが持つ音程の傾向をあるがままに受け入れることから実際の練習が始まります。ロングトーン、フレキシビリティ、音程への取り組み、これらは全てタールの教則本の第1巻で取り扱っています。練習曲としてはデュベルネのもの、ウォームアップにはマイケル・レアードの教本をお奨めします。トランペット奏者にはおなじみのスタンプのベンディングの練習やカルーソーの耐久力の練習なども有効でしょう。

補正孔の練習をする場合には、まずヤードが正しい位置にセットされているかどうかをチェックしなければなりません。ポジションをチェックするには、真ん中のCの音、上のGの2つの音のそれぞれで、穴を塞いだ時と開けた時の音程が同じであるかどうかをみるのがいい方法です。その音程が違っていたら、同じになるようにヤードを前後に動かして調整します。リードパイプのところで音程調節ができるタイプならば、リードパイプとヤードのコンビネーションでベストポジションを探すととなります。

補正孔の呼び方はメーカーによって統一がとれていませんが、4つ穴システムを考案したマイケル・レアードに倣うと、T=親指、2=人差し指、3=中指もしくは薬指、5=小指、となっています。3つ穴システムの場合は3番目の穴はなく、したがってT、2、5となります。4つ穴のタイプの楽器では特に手の位置が遠く、最初は慣れないものですし、ピストンとは異なり木管楽器のようなフィンガリングテクニックを必要とします。初めは親指の練習（Fの音）に焦点をあてたほうがいいでしょう。

もう1点、実践的なことですがつば抜きについて。たいていの楽器にはウォーターキーがついていません。したがってフレンチホルンのように楽器を回転させてリードパイプのところから水抜きをします。補正孔のついた楽器ならば親指の穴から水を出すことも可能です。

【本格的に勉強するには】

ナチュラルトランペットの演奏をプロとしてやっていこうとするのであれば、定評のある先生の指導を受け、集中的に練習して技術を磨き、歴史的に正しいとされる演奏技法を勉強し、レパートリーの習得をするなどのことが必要です。17, 18世紀の奏者たちは師匠の下で毎日レッスンを受け、2年間は研鑽を積むのが一般的だったと言われています。補正孔を使うのであればフィンガリングの技術も磨く必要があります。バロックトランペットやピリオド楽器による演奏の録音を聴くことも大事でしょう。また、生のコンサートを聴くのがもっと良いことは言うまでもありません。ピリオド楽器の演奏団体に関する情報源としては ~~PIPE web site~~ があります。こちらでコンサート情報を手に入れることもできるのでしょう。

楽器の練習に加えて、バロックの演奏様式を学ぶことも重要な課題です。現代の演奏と違う点は、音程（音律）、装飾と即興、アーティキュレーション、強弱の付け方、歌うような音のイメージなど多岐にわたります。幸い、バロック演奏に関しては適切な参考書がいくつか出ています。ケンブリッジ大学から出版された Cambridge Handbooks to the Historical Performance of Music (Cambridge University Press 1999) や ドントンの Baroque Music: Style and Performance (Norton & Co 1982) などです。

また、近年の研究による情報も有益ですが、歴史的な教本に勝るものはありません。ベンディネッリ、ファンティーニ、それにアルテンプルグなどの教本は、今では英語に翻訳されて出版されています。ファンティーニやアルテンプルグはアーティキュレーション、装飾、トリルなどについて取扱っています。また、フルート奏者だったクヴァンツの教本も大変参考になります。町楽師だったクヴァンツはフルートの他にオーボエやヴァイオリン、トランペットの演奏もマスターしていました。したがって、彼の教本ほど18世紀前半の演奏様式についてさまざまな面から適切に解説を加えたものは他にありません。

プロのナチュラルトランペット奏者たちはクヴァンツの教本の他にコルネット（ツィンク）の教本も参考にしているようです。これはレパートリーの開拓という目的ではなくて、バロック時代の器楽演奏における微妙なアーティキュレーションやフレー징が参考になるからです。ここではコルネット演奏について述べる余裕はありませんが、ジェレミー・ウェストの優れた教本 How to Play the Cornett

が豊富な情報を提供してくれます。コルネットはトランペットのアンブシュアと木管のフィンガリング技術の両方が必要とされるので、もしコルネットを勉強したいというのであれば事前にリコーダーをさらったほうがいいかもしれません。リコーダーはどこでも手に入りますし、トランペット練習の休憩に息の練習として使うのにちょうど良いでしょう。リコーダーとコルネットの運指は全く一緒というわけではありませんが、フィンガリングに慣れておけばトランペットから移行する時に抵抗が少ないだろうと思われれます。そして最後に、なんと言っても人間の声（歌）はすべての楽器が模倣すべきモデルでしたから、歌のプライベートレッスンを受けることはどの器楽奏者にとっても音楽性を高めることにつながるでしょう。

【結び】

バルブのないトランペットや他の金管古楽器を演奏してみると、金管演奏の芸術的な遺産が見えてくるのと同時に、トランペットの優れた演奏というものは時空を超えて不変だということを実感します。加えて、近年ピリオド楽器によるすぐれた演奏が盛んになってきたことが、モダン楽器によるクラシックの演奏にも影響を与えてきています。文化歴史学者のジャック・バーザンは次のように述べています。

「昔の曲をその時代の楽器で演奏するという最近のはやりは、単に音量が違うということだけではなく、音楽の意味そのものの違いを際立たせている。音色の違い（モダン楽器にあってピリオド楽器にないもの、あるいはその逆）は音楽の持つ力や雰囲気に影響を及ぼすし、それはケトルドラムであれオカリナであれ、音は単に音にすぎないというような乱暴な議論を一蹴してしまう力を持っている。それに、今や19世紀型のオーケストラが廃れ、室内楽がはやってきているのは、経済的な理由もあるけれども、ロマン主義そのものが古くさいという感覚になってきているからでもある」

ナチュラルトランペットに関しては、楽器に穴が付いているかどうかという点が依然として問題となっていて、正統志向派と実務派の間で熱い論争が続いています。ロバート・バークレイに代表される学者たちは補正孔に対して強く反対している一方で、マイケル・レアードのように補正孔をさらに開発することにより、たくさんの優れた演奏や録音を通してファンを増やして来た奏者たちがその対極にいます。正統志向派は正統性ということにこだわりますが、バロックトランペットのプロの奏者の大多数は現在穴付きの楽器を使っているのが現実です。正統的な楽器を使った演奏についてはまだ緒についたばかりという状況でしょう。

私は、この歴史的な楽器に対するアプローチとしてベストな態度は、謙虚にかつ旺盛な好奇心を持って接するのが良いと思います。私が思うに、トランペット演奏に関しては、現在新しい「黄金時代」にあるのではないのでしょうか。かつてエドワード・タールによるナチュラルトランペットの録音を初めて聴いた時、その素晴らしさに感動したのですが、一方で楽器の入手方法や練習方法については情報がなく全くの手探り状態でした。今や様変わりです。1989年にはヒストリック・ブラス・ソサイエティが創設されましたし、より多くのトランペット奏者がナチュラルトランペットを演奏するようになってきました。第1回のアルテンブルグコンテストが1995年に開催され、第2回は2001年11月に行われています。ナチュラルトランペットを演奏するには努力と自律を必要としますが、その努力に見合う以上の実りがあると思います。ナチュラルトランペットに興味はあるけれど、そんなことは無理だろうと諦めていたという読者がいたとするならば、この小論文が多少なりとも参考になって演奏する夢が実現することにつながれば望外の喜びです。

エリザ・コーラー

(日本語訳：中村孝志)